

# 東大寺僧齋然の入宋への志向

森 克 己

一

入宋僧齋然はその出自が明かではない。唯京都嵯峨の清涼寺の本尊釈迦如来、いわゆる三国伝来瑞像の胎内納入の東大寺僧義藏・同齋然結縁手印状によれば、俗姓は秦氏であるが、入宋して宋朝に申告した際は、姓は藤原氏と稱し、父は為真連、五品官と書いていたことは、『皇朝類苑』等によっても知ることができる。<sup>(1)</sup><sup>(2)</sup>

俗姓が秦氏であることは、その結縁手印状によって明瞭であるのに、何故入宋した際には藤原氏と自稱したのであろうか。これは恐らく遣唐使以来、内外では藤原氏が最もよく知られたわが国の貴姓であったので、入宋した際は、秦氏より通りのよい藤原姓を名乗ったものであろう。また

東大寺僧齋然の入宋への志向（森）

父の官位を五品官、すなわち五位と稱しているので、中央の下級官吏か、乃至は地方官かであったろう。また上掲三国伝来瑞像胎内納入物の中に、齋然が生れたときの臍帯に結び付けたものと思われる小さな紙片があり、その表裏に

（天慶元年）  
承平八年正月廿四日のひつしの□□のときにむま  
る □□とこ丸

と達筆に墨書されている。これによって見ると彼の生家は読み書きの教養を身につけた家柄であったことがわかる。但しその筆跡は達筆ではあるが、それほど気品のあるものとは思われないし、また連姓を称しているところからして、矢張りはじめに述べたように恐らく地方官または豪族の出であったろう。その生国も詳かではないが、秦姓を名乗るところからすれば、秦氏の本據地京都付近ではなかつ

東大寺僧齋然の入宋への志向（森）

たかと臆測される。これは後述するように、すでに入宋前の東大寺で修業時代から、山城国愛宕山の地を点定して、ここに一伽藍を建立することを志し、宋より帰り、朝廷に奏請し、この愛宕山に清涼寺を建立し、宿望を実現していることによっても推測される。つまり山城がその郷国であったからこそ、早くからその地理に詳しく、愛宕山を彼の宿志実現の地として点定しておいたからにはかならない。要するに彼の出自が以上のまうに臆測の範圍を出ないということは、彼が名門の出ではなかったことを物語っている。

彼の出家の動機は詳かにし難いが、若くして東大寺に入り、本寺並びに東南院に於て、觀理について三論宗を学び、天徳三年五月十八日師主寛静について受戒した。彼の跡に入宋した寂照・成尋・戒覚いずれも叡山に於て台密を学び、特に成尋の如きは、北宋宮廷の後苑に於て祈雨を行なつて雨を降らし、その功によつて神宗より善慧大師の大師号を与えられているほどであるが、これら後人に先立ち、最初に入宋の榮を担つた齋然もまた延命院の僧都元果より真言伝法灌頂を受けている。彼が永觀二年（雍熙元年）入宋に当り、東大寺より宋の汴京青龍寺に宛てた依頼状と

叡山より天台山に宛てた紹介状とを携えて宋地に赴き、<sup>(6)</sup> 永觀二年（雍熙二年）七、八月中汴京において清昭より金剛界・胎藏界兩部、三密大教を学び、灌頂を受けているのである。<sup>(7)</sup>

彼の入宋の動機は遡つて天祿三年に求めなければならぬ。すなわち同年閏二月三日午時、東大寺の同僚僧義藏と結縁のための手印状三通を作つて各々その一通を隨身した。<sup>(8)</sup> その結縁状には死生同心して仏法の興隆に努め、終には共に無上菩提を證せんことを誓い、このために山城国愛宕山を点定し、同心合力してここに伽藍を建立し、釈迦の遺法を興隆し、共に必ず兜率内院に生まれ、見仏聞法、共に弥勒に随從して、聞法得益、深く菩薩大悲の心を増し、十方淨土に往來せんことを現当二世にわたつて誓つたものである。その全文を左に掲げると

敬啓 十方三世諸佛菩薩・梵釋諸天・天神現當二世結縁

状

傳燈法師位齋然

天慶元年戊戌正月廿四日誕生、俗姓秦氏  
天徳三年五月十八日受戒、師主寛静

傳燈法師位義藏

天曆四年庚戌七月十五日誕生、俗姓多治  
氏、天徳二年十月廿二日受戒、師主法藏  
權少僧都

竊以五道之中、難得者人身、人身之中、難具者男根、縱

得男根、遇佛法難也、縱遇佛法、得出家之難也、縱雖出家、為修學僧難也、縱雖修學、住一伽藍難也、雖住一處、為同學難也、今齋然等值聖教以知古、廻愚心而思今、結緣於智勝如來說法之場、同生於釋迦大師遺教之域、即其結緣之趣、具見于化城品、又如經文說、世尊即為父、經法即為母、同學者兄弟、因是得度、因茲義藏等、近始從今生、遠至于菩提、結緣同意、發菩薩心、滿六度行、濟五趣生、抑義藏等、凡夫血肉之身、惑業煩惱未除、親疎難定、喜怒易變、是以十方三世諸佛、國內普天神明為證先一期生間、曾不變其志、設遇惡知識、寧令乖背其心、常存善知識、曾不違失其契、死生同心、寒温相問、若互失此結緣興法之心、終共不證無上菩提、是故點定愛宕山、同心合力建立一處之伽藍、興隆釋迦之遺法、然後第二生必共生兜率內院、見佛聞法、第三生共隨弥勒、下生閻浮、聞法得益、深增菩薩大悲之心、隨願往來十方淨土、疾證無上正等菩提、仍錄現當二世結緣狀、各持一通、將貽將來、

天祿三年

歲次  
壬申

閏一月三日

癸巳

午時、東大寺僧義藏

僧

「齋然」

この結緣狀には、同一の右手で、朱をもって捺した手判

東大寺僧齋然の入宋への志向（森）

が三カ所に捺されており、その真剣な氣持がわかる。事実またこれが彼が宋から將來した三国伝來瑞像の鉢内に納められていたのであるから、齋然は結緣狀に誓った通り、終身この結緣狀を身につけていたものに相違ない。

しからば齋然は、その修業のためにこのような真剣な誓いを立てなければならなかつたかというところ、齋然が受戒したのは二十一歳のとき、また義藏は九歳のときであり、齋然は義藏より大分歳長けてから出家したのであるから、修業も人よりも遅れており、また生家がこれという名門の家柄でもなく、特に仏門と関係のある家でもなかつたので、これを取り戻すには人一倍の努力を必要としたから、その真剣味がこの結緣狀となったものであろう。この結緣狀も年長の齋然が文を作ったものに相違ない。<sup>(8)</sup>

ところが凡夫は血肉の身の悲しさは、惑業煩惱をなかなか除き難いので、ここに入宋して五臺山の文殊菩薩の聖跡を巡禮しようとする志を立てたものである。

この五臺山は山西省代州にあり、一名清涼山ともいわれ、はじめは酈道元の著わした『水経注』などに仙人の住地と記されて、道教の靈山となっていたが、新訳華嚴経傳來と共にその方位、山形、山中の靈氣等の関係より華嚴経

中の記事をこの山に附会して、文殊師利菩薩止住示現の聖地とする妄説がすでに隋の頃から組織され、この風説は唐代より宋代にかけて華嚴經の流布にもなつて次第に高まつて来た。殊に唐の高宗のとき、中天竺よりこの山に参禮した仏陀波利が、この山において文殊の化身の老人に逢い、その命を受けて一旦西土に帰り、尊勝陀羅尼を携え来たつて再びこの山に籠り、生涯を終えたという伝えもあり、僧侶の巡拝するもの多く、巡拝路の所々には宿泊所として参拝の僧侶に提供する所の普通院という設備さえ設けられていた。<sup>(9)</sup>そしてこの五臺山と文殊菩薩との関係は、入唐僧侶らによつてはやくよりわが国にも紹介されていたことは、円仁の『入唐求法巡禮行記』中にこれに関する精細な記事が記されていることによつても推測される。<sup>(10)</sup>

そして平安期に入つて末法思想が盛んになつて来ると、僧侶の中には入宋して五臺山に登り、文殊菩薩が色々な形で示顯するその文殊の化身を拝み、罪障を消滅し、これによつて極來往生を遂げようと願うものが現われてきた。齋然はその入宋の第一号となつたのである。

齋然が入宋に際し、母の修善のために作らせた願文には齋然天祿以降有心渡海、本朝久停乃貢使而不遣、入唐間

待商賈之客而得渡、今遇其便欲遂此志、齋然願先五臺山、欲逢文殊之即身、願次詣中天竺、欲禮釈迦之遺跡、但我是罪障之身、血肉之眼、既到其土而不易、況見其身而可難、<sup>(11)</sup>然猶不顧軀命、不著名利、渡海登山、忍寒忘苦、修行是勤罪根漸滅、大慈大悲釈迦文殊、可以憐愍、可以相迎、<sup>(12)</sup>然猶不顧軀命、不著名利、渡海登山、忍寒忘苦、修行是勤、罪根漸滅、大慈大悲釈迦文殊、可以相迎、<sup>(13)</sup>為斗藪、為是菩提也、若適有天命、得到唐朝、有人問我、是汝何人、捨本土朝巨唐、有何心、有何願乎、答曰、我是日本國無才無行一羊僧也、為永法不來、為修行即來也、<sup>(14)</sup>とあり、入宋、五臺山巡禮の志向がすでに天祿以降に起つていたように述べている。

しかし上掲の天祿三年閏二月三日に認めた結縁状には、渡海、入宋、五臺山巡禮のことについては一言も触れておられないところより見ると、天祿三年までは、唯煩惱を除き、罪障消滅して兜率内院に生じ、弥勒に従い、十方浄土に往來することを願つたものであつたらう。ところが罪障消滅は容易なことではなかつたので、遂に入宋して五臺山に巡禮し、文殊菩薩の示顯を仰ぎ見て、罪障消滅、極樂往

生を願うようになったものと思われる。故に清凉寺釈迦如来像胎内に納められていた齋然の入宋求法巡禮行記によれば、雍熙元年（日本永観二年）三月十三日汴京を出発し、四月七日岱州五臺山大花嚴寺真容院に到着した齋然は、到着した日の申時に、同寺の菩薩像の右耳の上に白光が現われて、すぐには消えず、来会させた僧俗三百人が皆これを見たとか、或は四月十四日五臺山の金剛窟に至って礼拝し、ついで東臺に登ったところ、忽ち雷聲が響き渡り、飄雪が雹を降らせ、その大きさは鶏の卵大であったとか、或いは四月十五日早朝東臺に至ったところ、八十位いの鬚鬢共に白い老人が、二十歳ばかりの二人の若い従者を従えていた、従者の一人は青衣を着し、頭巾をかぶり、手に香爐をとり、一人は白衣を着し、頭巾をかぶり、手の拄杖をとってためらいながら何処かへ行ってしまったと、ちょうど伝説に出て来る文殊菩薩であったかのよう記しており、あるいは同日中臺に遊んだところ五色の雲が現われたとか、同日西臺に遊んだところ、瑞鳥靈禽が現われたとか、二十三日南臺に遊んだところ、夜三更、聖燈二炬が現われたとかと不可思議な現象の記事に充ちているのは、宿望の五臺山に詣でた歓喜のあまり、見るもの聞くもの皆文殊菩薩の

東大寺僧齋然の入宋への志向（森）

不可思議な示現と感じたからであろう。さればこそこの感激にひたって帰朝した、齋然は、結縁状に愛宕山に伽藍建立を誓ったかねてからの宿志を実現の場合、永延元年二月十一日愛宕山を宋の五臺山に准じて、清凉寺を建立したいと朝廷に奏請して許されており、ついで愛宕山に戒壇を建立する宣旨が下されたが、これは延暦寺の訴えによって中止された。<sup>64</sup>しかし永祚元年五月十二日には、齋然らの奏請によって、清凉寺に阿闍梨一口を置くことを許されているのである。

要する齋然が青年の頃、東大寺に学び、同僚義蔵と結縁して修行を誓った時点に於ては、齋然は未だ入宋して五臺山に巡禮しようということまでは考えてはいなかった。彼が修業を積むに従って、凡夫血肉の身の煩惱から離脱することの困難なことを知り、遂に入宋して文殊菩薩の常住するという五臺山に巡禮し、文殊菩薩の示現を拝して罪障を消滅し、極楽往生を遂げようと願うに至ったものである。そして齋然が入宋に際して母のために行なった修善の願文に、五臺山に登って文殊の即身に逢い、次いで中天竺に詣でて釈迦の遺跡を巡禮して罪障を消滅したいと願っているように、こうした巡禮沙門の究極の目的は、天竺に渡

東大寺僧齋然の入宋への志向（森）

つて釈迦の遺跡を巡拝することにあつた。このことは齋然に先き立って真如親玉（高岳親王）が入唐し、さらに天竺へ渡ろうとし、マレー半島の今日のシンガポール付近まで到達して、目的を達せず歿しており、齋然の後には柴西が入宋した後、渡天しようとしたが途中の交通が塞がれているために中止しており、殊に末法思想が強烈となつた鎌倉初期には、高山寺の明恵上人が、天竺に渡ろうと熱望し、同志を募り、長安都より釈迦の生れた王舎城への行程を文献について研究算出までしたが、遂の病氣のため果さなかつたといつたことは、皆末法思想の影響であり、すでに齋然の入宋にもその兆が現われているのである。

〔註〕

- (1) 清涼釈迦如来像内納入物  
 (2) 皇朝類苑、七十八、安邊御寇、日本

- (3) 清涼寺釈迦如来像内納入物、義藏齋然結縁手印状  
 (4) 参天台五臺山記  
 (5) 諸嗣宗脈紀、真言伝法灌頂宗脈  
 (6) 元亨釈書、十六、力遊九  
 (7) 清涼寺釈迦如来像内納入物、齋然入宋巡禮行並瑞造立記  
 (8) 清涼寺釈迦如来像内納入物、義藏・齋然結縁手印状  
 (9) 拙著「日宋文化交流の諸問題」  
 (10) 入唐求法巡禮行記  
 (11) 本朝文粹  
 (12) 清涼寺釈迦如来像内納入物、齋然入宋求法巡禮行並瑞造立記  
 (13) 花鳥餘情 和田英松博士本「類聚」  
 (14) 歴代編年集成 延歴寺衆徒申状  
 (15) 拙著「続日宋貿易の研究」  
 (16) 同前  
 (17) 拙著「続々日宋貿易の研究」